大杉栄の革命理論に関する私論（下）

諸伏　恒

第四章　大杉直接行動論の批判的検討

(一)　幸徳直接行動論の問題点

大杉こそ幸徳秋水の思想を最も独自的に継承した革命家であると言われている。確かに明治から大正にかけて中江兆民―幸徳秋水―大杉栄の各々には一筋の共通した血流をもつ革命思想がその底流にある。

幸徳と大杉においても、明治反逆児と大正反逆児と言うそれぞれ時代的相違はあるにせよ、一つの共通した思想的基盤を共有していたと言える。明治から大正への時代的推移は、その時代精神や地平に大きな飛躍があるが、幸徳こそその時代的橋渡しを担った革命家であり、その発展的継承者こそ大杉であった。

人間の歴史はその歴史の奥底に貫流している時代精神とも言うべきものを産出するものであり、と同時にその最もふさわしい体現者を輩出させていくものである。特に揺籃期としての大正時代は明治や昭和に比べて年数こそ少ないが、近代日本においてあらゆる意味からも極めて特異な時代であった。

明治から大正にかけて、幾多の革命家や反逆児が輩出したけれども、その中で革命家＝大正反逆児大杉の占める位置は極めてユニークである。とりわけ大杉が他の革命家たちに比べて傑出している点は、彼が当時においてまがりなりにも、未形成ではあるが自分独自の革命理論をもっていた点にあろう。ここにこそ、大杉の大正時代の特異な活躍の核心があると言える。

明治以来の欧米からの輸入革命思想や哲学の啓蒙家や宣伝家から、日本の土壌に根を下した革命思想家へ自己を飛躍させることは並み大抵にはできない。この苦闘を当時にあって最も精力的に取り組んだ人物の一人に、大杉も又確実に列挙される。

ところで、大杉のこの苦闘の契機となり、跳躍台になったものこそ、かの幸徳の直接行動論の一撃であった。

明治から大正への思想的橋渡しの役割を担い、新たなる地平への

水路を開拓した幸徳の直接行動論は、はっきりと思想的には明治社会主義を超克する一矢であったと言える。だが明治末期に幾多の革命家や社会主義者たちに強烈な衝撃を与えたこの一矢も、その後大逆事件から冬の時代にかけてその一沫の赤い炎を消したかにみえたが、やがて大正時代に再び時代揺籃の火となって燃えさかることになる。

さて、それまで合法的な兆民流の革新論者であった幸徳がはっきりと旧来の殻を破り始め、合法主義的立憲論から自らを解き放ち、革命的な急進思想を説き始めたのは、彼が米国から帰朝後、明治三十九年六月二十八日、神田錦町の錦輝館で催された日本社会党主催の帰朝歓迎演説会においてであった。

その演説会で彼は「世界革命運動の潮流」と題して、始めて直接行動論をぶったのである。

「欧米の同志は所謂議会政策以外において、社会的革命の手段方策を求めざるべからず。しかしてその方策や、よく王侯、紳士閥の全力、兵力、警察力に抵抗しうるものならざるべからず、少くともその鎮圧を免ぬがれうるものならざるべからず。しかして彼はよく発見せり。なんぞや。爆弾か、匕首か、竹槍か、むしろ旗か。いな、これらはみな十九世紀前半の遺物のみ。」

「将来革命の手段として、欧米同志のとらんとするところは、かく乱暴なものにあらざるなり。ただ労働者全体が手を拱して何事をもなさざること、数日もしくは数週、もしくは数ケ月なれば即ち足れり。しかして社会の一切の生産、交通機関の運転を停止せば、即ち足れり。換言すれば、所謂総同盟罷工をおこなうのみ」であると……。

勿論、この幸徳の直接行動論は、当時の労働運動の現実的状況や階級的な力関係や主体勢力の決定的な未成熟からも、観念的で空論的な非現実性は免れえなかった。それは一つの歴史的限界性でもあったのだ。だが、注目しなければならないのは、彼が日本の社会運動に与えた思想的な衝撃的一矢としての影響であった。

ところで幸徳が訪米中にこのような思想的飛躍をなした根拠はどこにあったか。いろいろと考えられるであろうが、次のような点が挙げられよう。

㈠ 進行するロシア第一革命を始めとするヨーロッパ革命運動の息吹きを感じ取り、世界史的激動の到来に確信をもった点であろう。彼は在米中亡命中のロシアのエスエル党員やアナキスト、さらにヨーロッパのアナキストとの交流をもっていた点からも、彼がロシアを始めるヨーロッパの革命の嵐に注視していたことは確実であろう。

㈡ 在米中に彼が主としてアメリカ亡命中のロシアのエスエル党員やアナキスト、ヨーロッパのアナルコサンディカリストと交流をもち、彼らの急進的なアナルコサンディカリズム的な戦略論や運動論に刺激されたと言える。

㈢ と共に、逆に第二インター主流派の議会政策や改良主義的運動への絶望感や無力感が激しい憤りのバネとなったとも言える。この点は彼の尊敬する中江兆民や田中正造の議会での孤立と疎外を身にしみて感じただけに一層の拍車をかけたと言える。

㈣ 最後に注目しなければならないのは、彼が在米中に旧来にはみられなかった極めて世界史的なインターナショナルな物の見方を身につけた点である。この点は彼の歴史認識にもみられるのであ

るが、逆に彼が日本国内の独自的な現実的状況を世界史的潮流の中に一般的にかつ短絡的に解消させてしまったと言う誤謬をうみ出す一因ともなってしまっている。(注)

(注) この幸徳の世界史的でインターナショナルな視野に立った歴史認識を最も発展的に学んでいるのは大杉であった点も注目すべきであろう。

これらの要因を踏み台にしてかつ足尾暴動―東京市電争議―別子暴動等にみられる人民暴動を実践的バネとして、当時の激動的転換期への幸徳の鋭い時代認識は、彼の立場を一層はっきりさせた。明治三九年三月二十日、雑誌『光』に載せた彼の論文の一節「革命は来れり、革命は初まれり。革命は露国より欧州に、欧州より世界に、猛火の原を燎くが如く蔓延しつつあり。今の世界は革命の世界也。今の時代は革命の時代也、戦は時代の児也、革命党たらざる能わず」はこのことをよく物語っている。

ところで衝撃の一矢としての幸徳の直接行動論も、幾多の点を内包していた。それはある意味では幸徳それ自身のみならず、歴史的限界性でもあったことは事実である。そしてそれは当然にも大正時代の最も重要な克服すべき課題でもあったのだ。

幸徳直接行動論の問題点を簡潔に取り上げてみると、

㈠ 彼の直接行動論は体系だった革命哲学や革命理論の有機的な戦略の一環として提示されたものではなく、どちらかと言えば議会政策的改良運動に対して急進的なゼネスト論を対峙させた運動戦術論的立場から提示されたものであると言える。それ故彼の直接行動とはゼネストと殆んど同意語と考えて差しつかえない位である。

㈡ そして、彼は自らの直接行動論をはっきりと社会的＝階級的立場に立って提示したのではなく、どちらかと言えば師兆民の平民主義的な立場とアナルコサンディカリズムの運動論とを折衷させて提示していると言える。(注)

㈢ そのために当然にも彼は、直接行動の社会的担い手を如何に形成していくべきかについては、平民一般に啓蒙宣伝するのみと言う首尾一貫しない立場に陥ち込んでしまっている。

だがこのような重大な欠陥を内包していたにせよ、幸徳直接行動論がいわゆる「非現実の現実性」を思想的にはもっていたのであり、これが後に大杉らによって一つの実践的現実性を獲得していくのである。

(注) 幸徳は確かに「労働者階級」なる語句を著作に用いている。この点からも階級概念は一応つかまれているが、実際には平民社的平民主義の立場を抜け切れなかったのではないかと思う。

ところで、幸徳が帰朝以後自らの直接行動論をはっきりとまとまった論文として提起するのは、明治四十年一月五日―二月五日にかけて日刊『平民新聞』に載せた論文「予が思想の変化」においてであった。

「労働者階級の慾するところは、政権の略取でなくて『パンの略取』である。法律でなくて、衣食である。

故に議会に対して殆んど用はないのである。若し、我が議会のなに条例の一項や、なに条例の数項を、あるいはつくり、あるいは改むることのみに依頼し、安心するほどならば、我らの事業は社会改良論者、国家社会党に一任しておいて沢山である。

これに反して、真に社会的革命を断行して、労働者階級の実際

生活を向上し、保全せんと慾せば、議会の勢力よりもむしろ、全力を労働者の団結、訓練にそそがねばならぬ。」

「同志諸君、予は以上の理由に於て、我が日本の社会主義運動は、今後議会政策をとることを止めて、一に団結せる労働者の直接行動を以って、その手段方針となさんことをのぞむのである。」

幸徳のこの思想的一撃は、明治四十年二月十七日、神田錦町の錦輝館で行われた日本社会党第二回大会において、はっきりと田添鉄二・片山潜等の議会政策派と幸徳秋水等の直接行動派との対立となって表面化した。この確執は大正を経て昭和に至るまで引き続いていたと言ってもよい。

ところで、社会主義運動のこのような変化をみてとった閥族政府桂太郎内閣からかわった西園寺内閣は早速その危険な兆候を階級的本能からかぎとり、明治四十年二月十九日社会党第二回大会決議の幸徳の演説文が掲載された『平民新聞』第二八号を「安寧秩序を乱すもの」として発禁処分にし、編集発行人石川三四郎と印刷責任者深尾韶を起訴している。そして弾圧は迅速をきわめ、二月二十二日には「日本社会党ハ、安寧秩序ニ妨害アリト認ムルヲ以ッテ、治安警察法第八条第二項ニヨリ、ソノ結社ヲ禁止スル旨、内務大臣ヨリ通達セラレリ」として日本社会党に解散命令を発している。更になおも西園寺内閣の弾圧は執拗をきわめ、三月三十一日には『平民新聞』第六三号に訳載された論文「青年に訴う」が朝憲紊乱に抵触するとして発禁命令を出し、訳者大杉栄、編集発行人石川三四郎、印刷人深尾韶を起訴している。このような天皇制権力の計画的で執拗な弾圧と財政難のため、四月十五日には遂に日刊『平民新聞』は解散を余儀なくされた。

かくの如き天皇制権力の先行的で予防的な直接行動派への集中弾圧は、支配権力がこの「危険思想」の将来的な現実的可能性を察知し、早期根絶を意図した結果に他ならない。大逆事件が極めて早くから計画的に手のこんだ陰謀をもってデッチ上げられたことからもそれは推察できる。

ところで、当時平民社議会政策派の運動論に懐疑的で反撥していた大杉は、この幸徳の直接行動論をいち早く支持している。彼がそれを公に明らかにするのは明治四十年二月六日から十二日にかけて『平民新聞』に載せた論文「欧州社会党運動の大勢」においてであった。

大杉はそこで「予は我が日本を見るに、かつては議会政策を以って唯一の革命運動なりとし、何人をもこれに対していくつかの疑問も挟まざりしが、遂に幸徳氏いでて議会政策の愚と陋とを絶叫するに至れり。予も又、予の革命的社会主義の立場より、議会政策はむしろ社会革命の気勢を弱むるものなりとし、しかして労働者の直接行動によらざれば、到底社会革命を全うし得べからずと信ずるに至れり」と述べている。

この当時の大杉の「革命的社会主義」なるものが如何なるものかその輪郭がはっきりしないが、大杉のその当時の反戦反軍思想の立場から、彼が幸徳の直接行動論に感激的な支持と共鳴を与えたのは当然でもあった。

だとするならば、問題となるのは大杉が幸徳直接行動論を支持した思想的動機は何かと言う点である。この点をふまえて、次に大杉の直接行動論の批判的検討を行なっていきたい。

(二) 大杉直接行動論の地平

大杉が本格的に労働運動や大衆運動に取り組み出したのは、月刊『平民新聞』を創刊して以降であるが、彼自身自らの革命哲学に基づく革命論や運動論を構築せんとする精神的かつ理論的な下地を形成するのは、一九〇八年のかの赤旗事件から冬の時代に至るまでの獄中での苦闘期である。

大杉自身も自らを評して「監獄でできた人間」と述べいるように、獄中での彼の精神的、思想的苦闘と研磨は、革命家大杉へと成長していく上に極めて重要なウェイトを占めている。大杉が幸徳から直接行動論を受け継ぎ、幸徳の域を越えてそれを自らの革命論まで高めていった過程で、この時期は決定的な比重を占めていると言える。

幸徳が直接行動論を喝破した頃は、確かに日本資本主義の揺籃期から成長期への転換期であり、それ故に社会的＝階級的基盤も大きく再編されつつある時期であった。日清―日露戦争を経て、日本資本主義は資本主義的な社会基盤を形成していったのみならず、世界史的な激動に規定されて列強に伍すべき近代帝国主義国への飛躍を準備した時期でもあったのだ。それ故社会的な階級構造の変動に相応して、支配権力の支配構造や形態もなし崩し的に変えられていった。そのような転換的な歴史背景の中で、プロレタリア階級の一大社会勢力としての著しい抬頭は、支配階級にとってはまことに無気味で脅威の存在であったと言えよう。

幸徳の直接行動論が旧来の啓蒙宣伝の域を越えて、明らかに抬頭するプロレタリア階級に、革命的な実践的運動の方向と力を与えうる危険な要素を先取り的に内包していることを、支配者は素早く予防的に、先行的に察知したからこそ、彼らは目くじらを立てて組織的で、陰謀的な弾圧を集中せしめたのである。特に大逆事件を契機とする幸徳秋水、森近運平等の直接行動派への狂気じみた集中的弾圧は、この当時の支配権力の恐怖＝弾圧の対象がどこにあったのかを端的に示すものと言えよう。この頃大杉は、例の赤旗事件で千葉監獄に拘束されていたわけであるが、獄中の直接行動派と目される大杉にも官憲の陰謀的な弾圧の魔手がのびていたことが、彼の『自叙伝』からも推察される。

ところで、このように明治天皇制権力から革命的な潜在的可能性をもつものとして、憎悪の対象とされていた幸徳の直接行動論も、もとより革命論としてはきわめて不十分であった。実際幸徳においては、直接行動論は革命論の一環としての提示と言うよりも、当時の議会主義的運動に対抗した急進的な運動論の戦術的な提示といった域を出るものではなかった。それが単なる一運動論としてではなく、革命哲学に裏打ちされ、透徹した時代認識に基づいた革命的水路と、その担い手を指し示す一つの革命論の中に不十分ながらも位置付けられていくのは、大正期における大杉の思想的苦闘を経てからである。

今日、大杉直接行動論の革命論としての欠陥や不十分性を指摘することはやさしいが、当時にあってこの飛躍を克ち取り、その果した役割の意義をも過少評価したり、無視抹殺したりするのは、全く歴史の捏造と言ってもさしつかえない。今日一般的に流布されている大杉の直接行動論＝急進的経済主義と言うシェーマも、必ずしも大杉の評価としては正確ではない。確かに大杉は議会運動、特に普

選運動に否定的であったし、又政治運動そのものに否定的ですらあった。前者について言えば、大杉が最も直接的に否定の対象としたのは、労働者大衆の湧き上る革命的エネルギーを議会と言う枠の中に収束せんとする議会主義的改良運動の傾向に対してであった。その意味では、鈴木文治等に代表される友愛会系の経済的改良主義も全くの否定の対象としてあったのだ。

大杉自身は当時アナルコサンディカリスト間で傾向的でさえあった経済運動＝急進的、政治運動＝改良的であるとするシェーマをさらさらとっていない。勿論彼自身、議会運動や政治運動の果たす独自的な重要な役割と意義を十分に認識していたとは思われないが、――それは一つには当時の歴史的限界性にも基因していると言えよう。

ところで後者の政治否定についてであるが、大杉はこの点に関して否定すべき本質としての政治否定と、現象として実在する否定すべき政治とを混同視していたために――政治の本質と現象が自己の存在論的な立場にたって有機的＝統一的に把えられていなかったために、短絡的で観念的な政治否定に転落する陥穽をもっていたことは事実である。大杉の政治否定論はマルクス主義的な実体的＝機能的側面からよりも、彼の人間本質論的側面――生命的存在でもあり、同時に社会的存在でもある矛盾的な有機的統一体としての人間のもつ二つの本質性たる権力意志性と社会的な創造進化性との対立的矛盾と葛藤からくる否定的産物の一つとしての政治――から把えられている。そのために、政治そのものが現実の世界でもつどろどろとしたリアリズム＝力学に対する肉迫が大杉の場合極めて弱いと言えるし、これはアナキズム一般に妥当する。

さて、大杉直接行動論が幸徳直接行動論を越え、同時に明治社会主義の殻を打破し、あらたに大正社会主義の地平を切り開いた最大の根拠は、湧き上る大衆＝労働運動のエネルギーをつかみとり、それなりの革命的水路を示す実践的提示を行った点にあった。大杉の直接行動論が当時にあって、一面ではきわめて現実的で実践的な革命運動論としての強さをもっていた第一の根拠は、何よりも彼のすぐれた大正揺籃期への透徹した時代認識の深さと抬頭する労働者大衆の革命的エネルギーと資質に対する信頼にあったと言える。彼は更にロシア革命を突破口にして朝鮮の独立運動の昂揚や中国での革命運動の爆発等民衆の革命的爆発とその世界的波及を彼一流の嗅覚で鋭く察知し、日本がいずれそれらの革命的な唸りの渦中に引きずりこまれながら追いつめられていく運命を免れえないだろうことを先見的に見抜いている。

「日本は今シベリアから、朝鮮から、支那から刻一刻分裂を迫られている。僕らはもうぼんやりしていることはできない」（『労働運動』第三次第一号）いつでも起つ準備がなければならないことを覚悟し、その渦中でのたうちまわる日本がいずれその活路を満州や中国への侵略と戦争にしか見出すことができなくなり、歴史の大きな潮流に叩きこまれるだろうことを予見している。この戦いが来る時、そしてそれはおそらくここ一ケ年内に迫ってくるであろうが、「『その時』に日本の運命がきまるのだ。」そして「その時」になって、まさに「日本そのものに分裂」が――即ち革命的な「社会的分裂」がおこるであろうことを予言している。そしてそれに対して社会主義者は「いつでも起つ準備がなければならないし」「労働者は一切の社会的でき事に対して、労働者自身の判断、労働者自身の常識を養え。

そして、その常識を具体化する威力を得んが為の、十分なる団体的組織を持て。労働者の将来はただ労働者自身の、この力の程度いかんにかかわる」ことを切実に訴えている。

当時にあって大杉のこの時代認識は、きわめてすぐれたものであると言わねばならない。この歴史を見る「眼の男」である大杉の時代認識の深さと正確さは、明らかに大杉の思想的高さを示すものであると言ってよい。

ところでこの頃、大杉は自らも労働者街亀戸に転居し、労働運動に取り組んでいく中で、労働運動の革命的発展にこそ天皇制権力の弾圧に抗し、「日本の運命」を労働者大衆自身が決定していく道があることを確信していった。特に一九一八年の米暴動を突破口にして全国的に爆発する労働争議や小作争議は、一九一九年―一九二〇年を第一次の頂点として未曽有の昂揚と気運を盛り上げていく。この革命的気運の昂揚に行動主義者たる大杉が、自己の革命家としての実践的に依拠すべき実体を見出していったことは当然でもあった。まさに「米騒動に発揮された民衆の直接行動の論理を継承し、それをあくまでも貫ぬいていくことで、日本革命への展望を切り開こうとするのが、その頃の大杉の思想的立場であった」（大沢正道著『大杉栄研究』）と言える。

明治以降の冬の時代の天皇制権力の直接的な弾圧と社会的な閉塞状況を打破し、一切の旧来の価値観を洗い落とし、湧き上る民衆のエネルギーの中にあらたなる時代の方向を求める揺籃期において、不定型で直接的な大衆運動の革命的発展の中にこそ時代の推進力を見出した大杉は、まさに最も時代の背景を忠実に体現した革命家であったとも言える。

大杉の直接行動論がきわめて現実性をもった革命論としての強さをもった第二の根拠は、彼が何よりも当時の革命的な労働運動や大衆運動の発展の中にこそ社会運動の歴史的実体を認識していた点にある。幸徳が自らの直接行動論を喝破した頃は、大杉の如き明確なる認識があったとは思われないし、又その直接行動の社会的担い手を明確にしていたとは思われない。その主要な要因は確かに背景となった時代的制約性にあったと思われる。

一方大杉は、友愛会系の労働運動の右翼的制動を何とか打破し、ロシア革命から米暴動を契機として湧き上る革命的な気運を背景とした、あらたなる戦闘的な「労働運動の転機」をなすべき必要性を強く痛感していた。

「労働者は今考えこんでいる。従来の所謂経済的運動にも政治的運動にも疑いをさしはさむと共に、政府や資本家の態度のいよいよ出でてますます強硬なのに激せられつつ、その運動の新規まき直しを考えている。」（『労働運動の転機』）大杉が直接行動論を革命論の核心として確信していく背景には、あきらかに大正揺籃期に示された労働者の戦闘的で、創造的で、自主的な革命的な資質に対する信頼と確信があった。それ故彼にあっては、運動の方向や運動の組織があらかじめ指定されたり、決定されたりすることを極力嫌う、非常に熱心な「革命的経験主義」とも言うべき立場がとられていた。（注）

（注）大杉にとってこの革命的経験主義＝白紙主義が彼の階級形成論となっているわけであるが、惜しむべくは、彼はこの革命的経験主義を彼独自の階級形成論へ収斂することなく、本能主義＝直観主義的な立場から認識論を否定した負の産物となってしまっている点である。なお付言すれば、日本アナキズムが大杉の突き出したこの問題を深化させ検討していないのは、やはり日本アナキ

ズムの思想的貧困の一因ともなっている。

彼の直接行動論が革命論へと構築されんとしていく過程においても、それは決してアプリオリに定型的な具体的形態や方向を理論の世界で組み立てていくものではなかった。だから当時（一九二〇年頃）の「労働組合そのものの自然の発達が、又それのみが革命を成就するものである。労働組合はその資本家制度との日々の闘争の結果、徐々にしかし必然に自己の中に将来社会の建設的発達をとげる」と言う一種の労働組合主義とも呼ぶべき荒畑寒村等の「労働組合万能論」にも、又堺利彦等の「労働組合生産管理説」にも、そして岩佐作太郎等の「労働組合はその性格上、自主自治的の革命的精神を持ち得ないものだ。徹頭徹尾、専制的、中央集権的性質のものだ」とする組合否定論にも反対している。

「労働組合運動が大体に於て、今日の資本家制度の破壊に導かれることは僕も認める。しかし、それが如何にして旧きものを破壊し、如何にして新しきものを建設して行くかは、あらかじめ定め得べき必然の道を辿るものではない。その進行の道は、組合運動そのものの中の種々なる傾向の関係及びそれと組合運動以外の種々なる傾向との関係によって決定せらるるべきものである。その一切の条件が未知か不可知かである間は、その決定は偶然的とも見ることのできるほどの蓋然的なものでなければならぬ。」更に「労働組合運動はそれ自身の中に、又一般社会の中に、なんらかの建設的傾向を確立して行く一大方法である。しかし、その所謂建設的傾向が、そのまま社会の基礎そのものになるほどの十分な発達をとげると言う、その『十分な発達』の程度いかんは、これまたあらかじめ決定することができない」（『労働運動』第一次第八号）とも述べている。

以上の点から大杉が果して、狭義のサンディカリズム的なゼネスト革命論者であったかどうかは疑問に思われる。彼の直接行動論が確かにアナルコサンディカリズムの組合連合主義の影響を大きく受けていたことは事実であり、「大杉は幸徳と異なり、むしろ、サンジカリズム――アナキズム運動を理想型として把えている。幸徳をロシア派とすれば、大杉は西欧――ラテン派と言うところである」（大沢正道著『大杉栄研究』）側面は持っていたが、彼の直接行動論はむしろ幸徳の直接行動論よりも、哲学的にも運動戦略的にも多様で豊富な内容をもっていた。彼がアナルコサンディカリズムを一つの運動論として把えてはいたが、それを「理想型」としていたか否かは何とも言えない。彼はロマンチズムとリアリズムの両側面を自らの発想法の要素として深く取り込んではいるが、理想を彼岸化する考え方は否定している。それ故アナキズムもサンディカリズムも彼の思想的＝実践的な一側面を表現してはいたが、それが理想化されたか否かとなると検討を要するところである。

ところで、確かなことは彼の直接行動論は幸徳流のゼネスト革命論よりもっと広義の内容をもっていたことである。彼自身、確かに自らをアナルコサンディカリストと自称しているが、それらに限定されることなく、彼の直接行動論は政治闘争も経済闘争をも、更に改良闘争も革命闘争をも包括的に取り込んだ革命的な社会闘争を意味していたのではなかろうか。（注）

（注）大杉の直接行動論はその内容を検討してみると、極めて包括的で単に労働運動の戦術的な一形態と規定することはできない意味をもつ。この点は余り言及されていないが、大正労働運動の一面を分析する一つの指針ともなるべき点である。

大杉の労働運動論について大沢は、「労働運動を経済闘争の枠内に封じこもうとする友愛会系の改良主義、労資協調主義の壁を突き破って政治闘争、革命闘争の戦列に労働運動を位置付ける革命的サンジカリズムの主張が、大杉の労働運動論のいわば本質論をなしている」のであり、「大杉の提唱した革命的サンジカリズムは、労働組合が経済闘争にとどまらず、政治闘争、革命闘争に主体的に参加することを要請している」（秋山清・大沢正道共著『幸徳・大杉・石川』）のであると述べているが、事実、大杉の直接行動論もそのような内容をもったものではなかろうか。ただ、大杉の直接行動論が当時の歴史的状況において現実的な力をもつ革命論としては大きな弱点をもっていた最大の根拠は、一貫した具体的な革命的なプログラムと自己権力論をもっていなかった点にある。

大杉の革命的経験主義とも言うべき「白紙主義」も、揺籃期としての大正社会主義運動に果した両側面を見なければならない。大杉が、労働運動や大衆運動の革命的な自主性や創造性に依拠し信頼するあまり、クロポトキン流の「労働者は先づその建設しようとする将来社会についての、はっきりした観念を持たねばならない。この観念をしっかりとつかんでいない労働者は革命の道具にはなるが、その主人にはなることができない」と言う考え方を拒否し、極めて楽観的で漠然と「労働者が本当に革命の主人となる為には、自分等の為の新社会を造る為には、何よりも先づ、労働者の解放は労働者自らが成就すると言う自主心の徹底に努めなければならない」（『労働運動』第一次第六号）と言うにすぎない。或る面ではこれは大正揺籃期の社会運動の特徴を示す点でもあるが、しかしここに大正社会運動の強さと弱さが存在していたのである。

自己権力論―組織論を媒介とした階級形成論――革命権力論が殆んど追求されなかったために、折角直接行動論を革命論へ構築せんとする端緒をつかみながら、掘り下げた深化をなしていない。むしろ、理論物神や知識万能に反撥するあまり、短絡的に直線的に本能主義直観主義に傾斜していったとさえ思われる。大杉は彼の反戦反軍論でも、又直接行動論でも、自己権力論の一歩手前まで駒を進めながら、それとの真正面な取り組みをリアリスティックに進めるのを回避し、将来社会論にうつっている。そして、この過程で彼独特の人間論から引き出された「永久革命」論でそれを補完している。（この点は第五章で詳述する。）

大杉の直接行動論は揺籃期としての大正社会主義運動の中で結実した革命理論ではあったが、やはり大正社会主義運動の歴史的限界性を免れえなかったと言える。

(三) 戦時ゼネスト論の問題点

大杉が自己の革命戦略の一つとして、戦時ゼネスト論を考えていたことは事実である。それは明らかにエルヴェ流の戦時一揆説＝戦時ゼネスト論を、アナルコサンディカリズムの側面からのゼネスト論と折衷的に結合させた産物とも言えないことはなかった。

第一次大戦がヨーロッパ大陸に無気味に刻一刻と差迫る中で、ドイツ社民党を始めヨーロッパの社会主義政党は、カウツキーを頭として社会排外主義に転落し、第二インターも帝国主義者の侵略と戦争を補完する社会排外主義へと変質し、ここに第二インターも崩壊する。そのような中でレーニンの率いるボルシェヴィキは第二インターの腐敗を激しく批判し、帝国主義戦争によってもたらされる戦

時の社会的危機に対しては革命的な社会的内乱をもって答えると言う戦略を打ち出した。一方ヨーロッパにおいて第二インターの転落と崩壊を乗り越えて、帝国主義者の侵略戦争に反対した一つにアナルコサンディカリズムの潮流があった。特にフランスのアナコサンディカリズムを中心として、戦時の社会的危機に対してはゼネラルストライキをもって答えんとする考え方があった。フランス社会党左派などがそうであった。この考え方は国際的には支配的ではなかったが、アナルコサンディカリズムの一つの戦時戦略とさえなっていたと言えよう。

大杉はこの戦時ゼネストと軍隊内の戦時一揆とを結合せしめたエルヴェ流の革命戦略を、当時の大正揺籃期の中でいかなる現実性をもつ戦略として考えていたのであろうか。実際大杉は、第一次大戦時には思想的な文筆の人であったと言った方がよく、行動は殆んどおこしていなかったので、実践的な現実的水路をどのように考えていたのか、推察の域を出ない。

第一次大戦時において、日本での戦時ゼネストに向けての現実的基盤は皆無に等しかったとは言え、問題は大杉が日本の侵略と戦争への突入の不可避性＝戦争における社会的危機（分裂）の到来と言う歴史認識をとりながら、この戦時ゼネスト論をいかに掘り下げていったかである。この点について言えば、大杉は自己の革命理論の二つの水路たる反戦反軍論からも直接行動論からも、これ以上深化させてはいない。

大杉自身、戦争が革命にとって好機であるとは考えていた。即ち、戦争によってもたらされる「社会的分裂」「社会的危機」には、彼もはっきりと一つの「革命的好機」として注目している。レーニンは「帝国主義戦争は革命の母である」と述べているが、大杉にあっては、その透徹した歴史認識に立って、満州―中国への侵略戦争への日本帝国主義の不可避的突入と、その時点での「日本の運命」の革命的分岐を予言していることからも、彼が戦争―革命を極めて密接に革命の側からたぐりよせて考えていたことは事実である。

大杉は戦時こそ「日本の運命」の分岐点になること、その時に労働者は「運命の主人公」にならねばならないこと、そしてそのために労働者は準備していかねばならないことを訴えてはいるが、具体的な点については言及していないので、その点についてはわかりにくい。彼の戦時ゼネスト論が果して彼の直接行動論を発展させた必然的帰結としてでてきたのかは検討を要する点であろうが、彼の言う戦時ゼネスト論とは今日的な組合ゼネスト論とは異なった大体次のようなものではなかったのかと思われる。

即ち、それは定型的な、組合主義的なゼネスト論と言うよりは、不定型で部分的な大衆的ストライキによる叛乱波状型ゼネスト論への発展を彼は考えていたのではなかろうか。大杉の革命的経験主義や革命的サンディカリズムの発想からも、そのように考えられるのではなかろうか。そして戦時こそそのような部分的なストライキや大衆叛乱型のストライキを、連続的に惹起せしめる社会的危機と現実的根拠があるのだと、彼は考えていたのであろう。それ故に彼にあっては、戦時ゼネストに向けて労働者を如何に思想的にかつ組織的に武装し準備していくかについては殆んど考えてはいない。否、むしろそのような考え方を否定さえしている。

彼の発想法はレーニン的な「革命理論は外部からやってきて」思想的＝実践的＝組織的に労働者を武装すると言った考え方ではなく、革命家は労働者が本来もっている革命的な「闘争性、自治自主性、創造性」を引き出し、労働者に「労働者の自覚」を促す「助産婦」的な役割を担えばよく、あとは労働者自らが革命的経験主義の下にその革命性を実現していくものであるとする極めて楽観的な考え方をしている。彼の白紙主義＝革命的経験主義がその否定的バネとして、友愛会系の予定調和的で定型的な改良主義的組合運動に対する反撥があったにしても、大体上のような考え方である。この大杉の考え方には一つには大正揺籃期としての歴史的制約性があったとも言える。

戦時に向けて帝国主義者もただ漠然と手をこまねいている訳では決してなく、戦争を積極的に請け負う労働運動を組織するために働きかける訳である。昭和期に入ってからのこの闘いはすさまじく、結果的にはかの産業報国会＝帝国主義者の労働者組織を許す結果となってしまったが、大正揺籃期には昭和期ほど支配者が「追い込ま」れていなかった点もあろうが、露骨なファッショ的な労働者攻撃＝資本家の企業弾圧と言ったものではなく、国家権力のイデオロギー的かつ組織的な労働者攻撃にまでは至っていなかったと言える。

特に大杉が活躍した大正前期はまさに労働運動の面からも、大衆運動の面からも、揺籃期としての昂揚期であったのである。ここに大杉の労働運動論なり、戦時ゼネスト論の歴史的背景があったと言える。大杉の戦時ゼネスト論が極めてアナルコサンディカリスティックな側面をもっていると同時に、他面でローザ・ルクセンブルクのマッセンストライキ的側面すら持っていると思われる歴史的背景の秘密がそこにあったわけである。

第五章　大杉のロシア革命論

(一)　「永久革命」論者としての大杉栄

大杉が「永久革命」論者であったなどと言うと極めて奇異に感じる人々があると思う。だが私は大杉が辿った哲学的軌跡からもこの仮説は正しいと思っている。大杉独自の人間観―社会観―革命観からもこのことは言えるとも思う。

私は大杉が大正揺籃期に極めてユニークな質をもって提起した「社会革命と個人革命の同時実現」の哲学的根拠――即ち、その同時性、相互規定性及び永久性についての哲学的根拠を何とか探りあててみたいと思った。今日この大杉の革命哲学について掘り下げた分析がなされていないのは、何とも淋しい限りである。

今日永久革命論者と言えば先ず第一に頭に浮かぶのはレオン・トロツキー等である。トロツキーの永久革命論が唯物社会史観に立脚した世界革命戦略であるのに対して、大杉の「永久革命」論は彼の独特の人間本質論に立脚した革命論であると言える。(注)

(注)　石川三四郎の永久革命がどちらかと言えば、「革命を人間の実存においてとらえている」（大沢正道著「ロマン的反逆と理性的反逆」）産物である――即ち、実存論―存在論と認識論に立脚して人間主義的に把えているのに対して、大杉の場合は人間本質論から実存論的分析に入っているのが特長である。

彼は自らの「永久革命論」の哲学的根拠として、大きく分けて次の三つの立場に立脚しているのではないかと思う。

㈠ ベルクソンの生命の純粋運動の連続性の概念について
㈡ ニーチェの人間の本質的存在からくる永劫的本質性について
㈢ クロポトキン流の人間の社会的存在性からくる社会的創造進化性と相互扶助性について

大杉はこれら三つの哲学的立脚点を基礎として、彼独特の革命哲学を創造している。

彼はまず人間の本質的存在性について、その生物学的―社会学的見地から、又ニーチェ流―クロポトキン流の生命の哲学と相互扶助進化説の立場から、人間は生命的存在でもあり、同時に社会的存在でもある有機的な統一的存在であると規定づけていると言える。そして人間のその本質的存在から人間の本質性を、権力意志性と社会的創造性においている。前者は明らかに生命の哲学やニーチェ流の哲学の影響を受け、後者は社会哲学的及びクロポトキン流の進化哲学の影響を受けていると言える。

そして大杉にあってはこのどちらも人間の本質性に根ざすものであり、それは又同時に対立矛盾する有機性をもった本質性としてあった。それ故に大杉にあって人間はその本質的な存在性からも対立的矛盾を永劫的に展開する有機的存在として把えられてあった。即ち人間の本質性としてある権力意志性も社会創造性も、その本質性から全く相いれない対立矛盾性としてあった。だから人間そのものの生命的バネは、実はこの二つの本質性の対立的矛盾としてある本質性そのものの永劫的展開にあったのである。大杉の人間本質論の核心はこの点に根ざすものである。

さて大杉の「社会革命と個人革命の同時実現」の同時性、相互規定性及び永久性の具体的な哲学的根拠の分析に入っていきたい。

私は大杉が「社会革命と個人革命の同時実現」を説いた思想的背景を探ってみたいと言う衝動にかられて大杉革命哲学の軌跡を追ってみた訳であるが、前記の彼の革命論には㈠同時性、㈡相互規定性、㈢永久性の三つの基本的な要因が立体的な軸となって構成されているのではなかろうかと思う。勿論そのヒントは前述したスティルナー・ベルクソン――ニーチェ――クロポトキン等の哲学の批判的摂取にあったことは言うまでもない。大杉のこの革命哲学は大正時代を色彩った個人主義哲学の単純な産物では決してない。彼にとってそれは唯一の立脚点ではなく、幾多の思想的立脚点の一つなのである。

さて、大杉の「社会革命と個人革命」の同時性の哲学的根拠を、彼はどこにおいたのであろうか。

それはまず第一点に、彼の人間哲学――社会哲学にあったと言える。即ち、それは人間は生命的存在であり、同時に社会的存在でもある有機的な統一的存在であることから規定される人間の二つの本質的存在性の「不可分性」（＝同時性）にあった。それ故に彼にあっては、個人と個人の有機的集合体たる社会とは、本質的に「対立性」をもつと同時に「有機的な一体性」をももつものとして把えられ、その二つの本質性が「対立と闘争」を繰り返しながら、逆にそれを創造的な進化のバネとして個人にも社会にも体現されていくものであると把握されていたと思う。彼の「社会的個人主義」の哲学的な背景もそのようなものとしてあったものと思う。それ故に彼の発想には社会と個人とは「対立性」と「有機的一体性」とを推進力としながら、不可分の立体的な「同時進行」を勝ち取っていくものであるとする考え方があったと思う。

第二点には彼の革命観があった。彼にとっては革命とは社会革命であると共に同時に個人革命でもあらねばならないとする。そして政治革命――経済革命――文化革命の段階革命ではなく、それらを同時に実現していく社会革命――個人革命としてあった。ここにはあきらかにユニークな彼の人間主義的革命観が発想の起点になっていることは言うまでもない。彼にとって革命原理とは完結性にあったのではなく、無限性（＝包括性）と永久性にあったと言える。

次に第二の基本要因としてあった「社会革命と個人革命」の「相互規定性」について言及したい。この相互規定性とは相互規定し合いながら創造的進化性を実現していくことをも含むものである。この性格は大杉の人間観―社会観からきているのではなかろうか。即ち大杉には社会と個人とは併列的、対立的に把えられているのではなく、社会と個人とは人間本質的にも、又社会が人間の有機的集合体であることからも、「対立性と有機的一体性」とを同時的に永続的に「相互規定性」をもって展開していく中に「創造的進化」があると考えていたのではなかろうか。人間の二つの本質的存在の不可分性と同時に、人間の生命的存在もその社会的存在性の中に創造的進化を実現していくものであり、人間は本来的にそのような生命エネルギーを持っており、そしてその過程は決してスムーズなものではなく、「葛藤と闘争」の連続史であると……。

それ故に大杉にあって「社会革命と個人革命」とは不可分の、同時性をもった一つものとして立体的に把えられており、そしてこの「二つの革命」は「相互に規定」し合いながら「永久的」に展開されていくものであると考えられる。少くとも大杉が辿った哲学的軌跡を追体験した一つの結論として……。

さて、大杉革命哲学（大杉の著作のみならず、大杉の哲学的な軌跡をも含めて）の核心としてある「社会革命と個人革命の同時進行」の「永久性」について検討してみたい。

大杉革命哲学の第三の基本性格としてある「永久性」の概念は、㈠ニーチェの永遠哲学、㈡ベルクソンの「生命の純粋連続」の概念、㈢クロポトキンの相互扶助進化説の三つを立脚点にして、彼の人間学―社会学の視座から独自的に構築せんとした方向ではなかろうか。勿論今私が述べている大杉革命哲学の三つの基本性格を、大杉自身がとりたてて述べている訳ではない。これはあくまでも大杉が構想した「社会革命と個人革命との同時実現」の哲学的根拠と内容を探索し、彼の哲学的軌跡を追体験して得た、私なりの仮説である。だが、私は得手勝手に解釈している訳では決してない。当時にあって大杉の思想的高さは第一級であり、私はこの思想家が引きだした結論に至る過程を哲学的にえぐり出してみたいと考えているにすぎない。

大杉が恐らく考えたのではなかろうかと思われる革命の「永久性」の哲学的根拠は次の点にあったのではなかろうか。

㈠ 第一には革命主体としての人間そのものは、その本質性としての「社会的創造性」と「権力意志性」が対立矛盾しながら、その「葛藤と闘争」とを「永久的」に展開していく中に、「創造的進化」と革命的エネルギーをつくり出していく存在であるとする考え方がある。

㈡ 第二には彼はベルクソンやニーチェ流の「流れの哲学」から革命を把えており、革命とはその「流れ」の中の「生命の最も根源的な飛躍」（「生の哲学」）であり、「生命の『純粋持続』としての

永遠的能動性」（ベルクソン「社会的創造進化」）の湧き上りであり、「一種の上げ潮」であると把えている。

㈢ 第三点には「社会革命と個人革命の同時実現」とは一回性をもって実現されるものとしてではなく、「永久的」な展開をもってその有機的な全体性と一体性を実現していくものであると考えたことである。

㈣ 第四点は「永久性」の概念の中にニーチェ流の「円環的な回帰性」を見出したのではなく、クロポトキン流の「社会的創造進化性」を引き出した点である。前者の結論は明らかに人間本質を「権力意志」に一面化した必然的帰結であるが、大杉の場合はそれとは全く異なった立場をとっていることは前述の通りである。

ところで、大杉革命哲学の三つの基本性格はいかなる思想的視座を立脚点にして「社会革命と個人革命の同時実現」論として有機的＝統一的に構築されんとしたかについて言及してみたい。実はこの点が大杉革命理論の優越性と脆弱性をも示す核心となってくるからである。

大杉の革命哲学に一貫して流れる根底的な視座は、第一には人間学的な立場である。大杉の「社会革命と個人革命の同時実現」論の立体的構築にも一貫して彼が立脚している踏み台は、この人間学的な立場であると言える。それは単に個人主義哲学に矮少化されるものでは決してなく、もっと根底的で包括的である。

第二点とは第一点を基礎とした人間社会学的とも言うべき立場である。大杉は千葉監獄での獄中勉強の目標を『獄中記』でも述べているように、「自分で一個の社会学」を構築せんとにおいている。それは人間学からの社会学へのアプローチをなす社会哲学的な「人間社会学」であり、これが大杉の「監獄社会学」ではなかったかと思う。そして大杉は「人間学」と「社会学」の有機的統一の下に独自の哲学の構築をなさんとしている訳であるが、その媒介的環となったものは今日流で言えば「主体性論」としての独特の「自我」論であったと言える。

さて、そこで問題となるのは大杉のそのような哲学的視座そのものである。大杉哲学の思想的な根底的な視座ともなったこの「人間社会学」こそ、思想的な豊潤さや包括性を示すと同時に脆弱性をも示すこととなったのである。

彼の哲学の最大の脆弱性は、その「人間学」と「社会学」の有機的＝統一的未構築からもくる。客観的な社会歴史観と体系的な認識論的見地の欠落と否定にあったのではないかと思う。それ故一面では彼の哲学は極めて本質的側面を衝いておりながらも、主観主義的で観念的な傾向を免れ得なかったのではないかと思う。これは多分に「直観主義」「本能主義」の考え方の「負の影響」があったのではないかと思う。

以上大杉の革命哲学の概略を見てきたわけであるが、更に大杉のロシア革命論の具体的な検討に入っていき、最後に今日未だ未確定であると明言できる大杉の思想史的位置づけの必要性とその問題点の検討に移っていきたい。

㈡ 大杉のソビエト論の検討

ロシア革命ほど支配階級を戦慄させ、プロレタリア階級を感動せしめた世界史的事件はない。まさにロシア革命はそれまでの世界史の歩みを根底からかえた大事変であった。

日本にもこのロシア革命の雷鳴は遅ればせながら入り、日本の社会主義者のみならず、一般の労働者の心をも激しく感激的に揺さぶったのである。当時日本においては、冬の時代の暗黒の厚い権力の壁を破って、蓄積された大衆の革命的エネルギーが爆発し、大衆運動でも労働運動でも未曽有の規模と激しさをもって展開された大正社会主義運動の序幕期であった。この序幕を最も象徴的に切って落としたものこそ、ロシア革命の勝利と全国米暴動であった。ロシア革命は米暴動と共にその後の大正社会運動の精神的核であった。日本の革命家や社会主義者もこのロシア革命の勝利の報が入るや否や、無条件の感激的な支持を表明している。

大杉がロシア革命への連帯と支持を公に表明するのは、例の日蔭茶屋事件で半ば孤立無援の状態であったため、かなり遅れて「翌一九一八年（大正七年）四月赤坂台町にある福田狂二の化物屋敷のような家の二階で開かれた『ロシア革命記念会』の時に始まるのである。」（大沢正道著『大杉栄研究』）

大杉がロシア革命の革命的側面として注目した点は、一般に「第一は革命初期におけるソビエト運動、第二は一九一九年末頃より起こった労働反対派の運動、第三はウクライナにおいて『無政府主義将軍』の異名を取ったネストル・マフノを中心とするマフノ運動」（前掲書）であるとされるが、特に第一のソビエト運動と第三のマフノ運動に注目している。

その中で彼がペテルブルグの労働者の中から一九〇五年ロシア第一革命の頃、自然発生的に創造されたソビエト運動に注目し、これを評価した思想的根拠はどこにあったのか。

㈠ 第一には矛盾対立的存在としてある人間が、自己の本質的な矛盾と対立を人間的創造進化のバネとして自己を「改造＝革命」していく実体的な運動とエネルギーを、ソビエト運動のもつ「自主性・創造性」と「自由と闘争」の中に見出した。

㈡ 第二点には彼の「社会革命と個人革命の同時実現」の現実的＝実体的な担い手を、革命の両側面を体現している労働者のソビエト運動の中に見出したのである。

㈢ 第三点には彼の考える「永久」革命の――そして社会建設の実体的萌芽とその行動原理を自由ソビエト運動の――「言葉の完全な意味におけるソビエト運動」（ヴォーリン）の「自由と叛逆」と「創造性・自主性・戦闘性」に求めたのである。

大杉は人間が――人間社会がもつ「権力性」は人間の裏面の本質性を示す「人間の業」のようなものとして考えている反面、同時に人間はこれと闘い、これを打ち砕き止揚していくもう一つの「社会的創造進化」を本質性としてもっており、人間はこの「権力意志」からの『呪縛』と闘い、これから人間を物質的にも、精神的にも解放する闘いを果てることなき宿命として持っており、この中にこそ人間の社会的創造進化があると考えている。

生は永久の闘いである。

自然との闘い、社会との闘い、

他の生との闘い、

永久に解決のない闘いである。

（大杉栄「むだ花」一九一三年）

大杉のソビエト運動に対する評価の思想的背景にはそのようなものがあった。それ故に「最初ソビエトが未だ労働者の組織としての性格を持っており」（ヴォーリン）労働者の自主性と創造性が発揮さ

れている革命的な自由ソビエト運動から、一七年二月―十月革命に至る過程での「武装蜂起を準備する、革命権力機関」（レーニン）、「統一戦線の最高形態」（トロツキー）としての権力機関、つまり政治権力としての革命権力機関という性格を経て、十月革命後の――特に一九年から二一年の内戦過程における――「権力、中央集権、国家統制の基盤の上に組織された純粋に政治的な組織となってしまったソビエト」（一九一九年ナバト宣言）に大杉は大きく失望し、ソビエト運動の本質が変質し解体されたと考えた。

それは革命権力の内外の危機にさらされたボルシェヴィキ政権が「革命秩序の回復を急ぐ余り」ソビエトを完全にボルシェヴィキの権力を維持し、秩序を維持する政治権力機関に一面化してしまった点にあり、大杉はその点に「ロシア革命は途中で挫折せしめられた」最大の感慨を抱き、クロンシュタット反乱とマフノ運動をして「ロシア革命のやり直しが始まり」「ソビエトは、ロシア革命の最初の時期の様に、全く自主自治の『自由ソビエト』でなければならない」と語らしめるに至ったと言えよう。

大杉の革命哲学から言えば、（過渡期の）革命権力は一種の二律背反的とさえ思える自己矛盾と自己否定をもった権力である。そもそも人間の本質そのものがそのようなものとしてあった。権力の本質性から言ったならば、革命権力は全く自己矛盾と自己解体に至る創造性と自由自主性を体現していかなければならないとする宿命をもっており、それが革命権力の核心的バネとされている。

しかし、大杉にとってこの革命権力の「宿命」は必ずや空間的にも――時間的にも、本質的にも――実体的＝現象的にも切り離されたり、分化されたりしてはならないものであり、それ故に「同時性」をもって実現される過程が「永久性」をもって展開される過程でもあったのだ。大杉には明らかに「人間の――人間社会の（生の）業」とも思える権力性が実体的＝機能的に死滅するとも、又客観主義⇔主観主義的にも、生産力主義的にも死滅するものとも考えていない。大杉の革命理論の「同時性」と「永久性」とはそのような内容のものであった。

大杉が初期ソビエト運動にそのような「果しなき宿命」を革命的に展開していく実体的萌芽を見出しながら、ボルシェヴィキによるソビエトの変質と解体に失望していった根拠はそこにあった。

大杉自身、一貫した革命権力＝自己権力、それ故に革命組織論＝（党組織論）をもっていた訳ではなく、それらを一般的に否定したこともなく、否むしろ賛成していたが、少くともその陥穽に何よりも心配していたことは事実である。ただ、大杉は所謂自由ソビエト主義者であったかどうかは別にしても、彼の自然回帰論的な偉大なユートピアへの飛翔は、ニーチェ流の権力意志論やマルクス主義の過渡期権力論を決して超克したものであるとは言えない。

このことは彼の反権力・反国家論が一体如何なる原理と内実をもったものであるかを改めて問い直すものとなろう。私は大杉の論文の行間からこの点を何とかかぎ出してみたいと思ったが、正直に言えば不成功であった。或いは私の読解力の不足からかもしれない。

だが、それはまた大杉が天皇制国家論や過渡期権力論について自己の積極的な理論展開をしていないこととも関係があるかと思われる。このことは大正三大潮流の一つたる大正テロリズムの一種たる左翼テロリズム＝カティズムの発生の基因と決して無関係ではない。一般に大正アナキストのテロリズムが、アナ・ボル論争後のアナキズムの終焉を飾る絶望的な産物として、大杉らの思想や運動とは無関係の如く切り離して述べられているが、果してそうであろうか。（小松隆二「日本アナキズムの終焉」『現代と思想』第四号等）

大杉が自らの反権力・反国家論で積極的に独自の自己権力や国家破壊の原理を展開し、それらを超克するだけの思想を打ち出しておらず、どちらかと言えば短絡的に回避した点などは勿論大杉に限らず、アナキズムの反権力・反国家論の貧困性をさらけ出すことになる。大杉もその模索をバクーニン流の国家破壊論に後半見出そうとした点がみられるが、しかしそれとて体系的なものとなってはいない。

ニーチェやバクーニンの思想的摂取を行った大杉が、彼らのもう一つの重要な側面となっている筈のニーチェの権力意志論やバクーニン（ネチャーエフ）のカティズムをどのように把えていたかは明らかではない。推測をたくましくすれば、どちらかと言えば、彼はプラグマティックにかぎ分けて、その革命的側面を摂取していったと言える。それ故にこれらの点との苦闘の痕跡がどの程度あったのかわからない。

それ故にこの点の大杉の模索がどの程度あったのかを跡付けることは、彼のソビエト論の立脚点がどこにあったのかと言う点とも関連して、重要な大杉研究の課題となろう。

㈢ 労働反対派やマフノ運動に対する見解

大杉がロシア革命への第二の注目すべき点として挙げているのが、例の一九二〇年秋頃から始まるボルシェヴィキ内の労働組合論争における、労働反対派（＝ボルシェヴィキ左派）の見解と、一九一八年から二一年にかけてのウクライナ闘争＝マフノ運動である。

前者については大杉は極めてアナルコサンディカリズムの立場から労働反対派の見解を評価しており、後者については明らかに「永久」革命論者としての視点から「マフノ運動とは要するにロシア革命を僕らの言う本当の意味の社会革命に導こうとした、ウクライナの農民の本能的な運動である」（「無政府主義将軍ネストル・マフノ」）と評価している。

ところで、前者のボルシェヴィキ内労働組合論争について事実関係を簡単に追ってみると、この論争の直接的発生要因の背景は明らかに戦時共産主義政策の行詰りと破綻にあった。一九一九年―二〇年頃の国内は政治的―経済的―社会的にも混乱と危機の渦中にあり、革命ロシアは存亡の瀬戸際にあったとさえ言える。国内戦―干渉戦、食糧危機とストライキの続発、国内経済の混乱と人民の疲弊とで、それこそ「生みの苦しみ」に頻していたと言える。

このような未曽有の苦闘期に革命ロシアは、極めて密接な糸につながる三つの大きな事件に遭遇したと思う。即ち、労働組合論争――クロンシュタット反乱――マフノ運動である。大杉にとってもこの三つの歴史的事件は、彼のロシア革命の評価において転換的契機とすらなっている。

第一点の労働組合論争の発生の端緒はトロツキーの政策提起にあった。それは未曽有の困窮と危機の渦中で、行き詰りと破綻にみまわれた戦時共産主義政策の破産を如何に克服し、革命ロシアの建て直しを図るかと言うことであった。トロツキーはその政治的―社会的―経済的な建て直しと打開の基本的方向を、㈠革命権力の党への中央集権的強化と、㈡その強大な党権力を媒介とした「労働の軍隊

化」をもって、労働規律と強制的な統制を強化し、同時に労働生産性の向上を図ることによって経済的建て直しを目論まんとした。それは当然にも、㈠官僚主義的とも言える権力の肥大化と、㈡今までのソビエト―労働組合の自立性や自主性を奪い取るものとしてあった。

このトロツキー派の提案に真向うから反対したのは、ボルシェヴィキ左派と言われる労働反対派であった。労働反対派たるシュリヤプニコフ、ルトヴィノフ、コロンタイ等の主張した点は、戦時共産主義政策の行詰りと破局の克服策として、㈠労働者大衆の創意性と自発性に依拠したソビエト―労働組合の強化と充実、㈡それらを基礎として発展させた労働者の「経済管理」＝「生産管理」を挙げた点であった。

この労働反対派の主張は、当然にもトロツキー派の党―ソビエト―労働組合の党への権力の一元的な強化をなさんとする主張とは全く対極的な党―ソビエト―労働組合の権力の分立論を唱えるものであった。

レーニン等の慎重派＝緩衝派は、どちらかと言えば本質的にはトロツキー派に近く、政治的には中間的に位置していた。

さて、この労働組合論争が公然と開始されたのは、一九二〇年十二月三十日、モスクワボリショイ劇場で開催されたソビエト大会共産党フラクション会議であった。その後約半年位討論の嵐を巻き起すのであるが、終極的にはレーニン派がトロツキー派の提起を取り込んで労働反対派の追放をもって幕を閉じている。

ところで大杉がこの労働組合論争における労働反対派の主張を評価した視座は、どこにあったのであろうか。

第一点は明らかにプロレタリア階級独裁⇓党権力独裁への、権力が本質性として持つ悪無限的な昇化と純化に対する批判であった。本来的に否定＝止揚すべき革命権力＝過渡期権力と言えども、実体的＝機能的に固定化されれば必ずその本質性を開花させるものであり、そのことは不可避であると、大杉は考えていた。(注)

大杉はこれを彼独特の権力論とアナルコサンディカリズムの連合主義の視座から批判していると考えられる。

第二点は将来社会の建設論に関する問題である。大杉自身、明確な将来社会論をもっていたかは詳しくはわからないが、少くとも大雑把にはプルードンやクロポトキン流の自由連合社会――無政府共産社会を思い描いていたのではなかろうか。そしてその実体的萌芽を自由ソビエト運動―組合運動の自主的で創造的な発展に期待していたのではなかろうか。その意味から革命ロシアでこの論争以後急速に進行する実質的な、自由ソビエト運動と自主的＝創造的な組合運動の形骸化と解体は、大杉には何よりも「革命の挫折」としてしか映らなかった。「一九一七年の革命時代にあれほど重大な役目を勤めた労組は、共産主義国家によって、戦闘的労働団体としては絶滅されて了った。そして所謂労働組合は国家の付属物となり、その主たる機能は労働に関する政府の命令の伝達となった。」(「労農ロシアの新労働運動」)と彼が失望して述べていることからもこのことが言える。

(注) 大杉の権力論はその人間社会学的立場からの権力本質論を説いているところに特徴がある訳であるが、それ故に権力実体―権力形態論はすっぽり抜け落ちている。更に大杉の社会哲学には社会歴史的視点が稀薄であることが挙げられる。だから大杉には過渡期の概念も明確ではない。

さて大杉はこの労働反対派の運動から、クロンシュタット叛乱―マフノ運動を通して、現実のソビエト・ロシアに極めて批判的となる。そのうちでも特にマフノ運動に注目し、彼自身も欧州脱出への重要な課題として、マフノ運動に関する資料の蒐集とマフノの片腕ヴォーリンとの会見をあげている位である(『日本脱出記』「無政府主義将軍ネストル・マフノ)。

ところで彼がマフノ運動を評価した視点は一体どこにあったのか。大杉自身「マフノビチナは全く自主自治なソビエトの平和な組織であると共に、その自由を侵そうとするあらゆる敵に対する勇敢なパルチザンであった」と述べ、そして「ロシア革命を僕らの言う本当の意味の社会革命に導こうとした、ウクライナ農民の本能的な運動」(「無政府主義将軍ネストル・マフノ」)と規定している。ここには明らかにウクライナ的な土着性をもったマフノ運動の創造性と自主性に対する評価と、革命的な農民のエネルギーに対する信頼があったと言える。

ヴォーリンはマフノ運動をして「マフノビズムは世界的なものであり、不朽のものである……。労働者大衆が服従されたままにはなっておらず、独立への志向を培い、彼らの階級意識と階級精神を集中し、表現するところではどこにおいても、いつも彼ら自身の人民社会運動を創造するであろうし、彼ら自身の見解に従って行動するであろう。それこそマフノビズムの真髄をなすものである」(『知られざる革命』)と述べ、マフノ運動のもつ世界性＝普遍性を挙げ、その土着的な独立性と創造性と戦闘性を高く評価している。クロンシュタット叛乱にせよ、マフノ叛乱運動にせよ、その突き出した問題があまりにも本質的で普遍的であったが故に、ボルシェヴィキ権力にあまりにも現実的＝政治的に処理された悲劇があると思う。

次に大杉がマフノ運動を評価した第二点は、マフノ運動こそ革命を永続的に発展させる第三、第四の革命であると把えており、マフノ運動の自由ソビエト運動こそ最も核心的な萌芽であると考えたのではなかろうか。

大杉が「この運動の研究こそ、ロシア革命が僕らに与えることのできる一番大きな教訓をもたらすものじゃあるまいか」と言う言葉の意味はかなり多様にもとれる。レーニンは極めて強烈な破壊者であると共に、極めてリゴーラスでプラグマティックな建設者でもあるのだが、そしてその理論建設はマルクス主義的な破壊――建設の明確な段階的分化をとっているのに対して、大杉は殆んどバクーニン流の破壊――建設の同時弁証法をとっている点からも、根本的な相違がある。

前述の大杉の発言には力学的で現実的な革命家というよりも、永久革命や永遠の叛逆運動に自己のパトスとロマンを賭けるロマン革命家としての側面をみてとることもできるし、政治への叛逆と自由ソビエト運動に本能的に行動の指針を求める自由ソビエト主義者とも言うべき側面も表われており、或いは現実の、無慈悲に進む事態の前にロマン的な敗北を余儀なくされた悲劇的革命家としての側面すらにじみ出ていると言える。

本来大杉と言う人は革命を政治力学的に、陰謀的にみることのできない革命家であり、奔放で本能的な反逆児としての眼から革命をとらえる人であったのではないかと思う。マフノ自身に自分と共通の因子を見出し、極めて計算されたボルシェヴィキの政治力学の前に敗北を余儀なくされたマフノ運動の普遍性＝世界性＝永久性を持

ち前の嗅覚で摂り出し、自己の革命哲学に取り込んでいくこの大杉の反逆的旺盛さは、やはり当時の大正社会主義者の中でも異質なものであったのであろう。

大杉は革命的政治家、革命的陰謀家としては未熟であり、否そのような存在を否定していたかもわからないが、革命的反逆家としては良きにつけ、悪しきにつけ、凡人を抜き出でた一級の人物であったことは間違いない。

第六章　結び

最後に私が大杉栄研究を取り組んでいく過程で痛感した最大の問題点は、「大杉栄の日本における思想史的位置の未確定と言う現状とその確定の必要性」についてである。

明治の後胤であると共に大正揺籃期の寵児でもあった大杉の思想史的位置付けにおいて次の三つの大杉の顔が軸となる。即ち、㈠反戦反軍思想の啓蒙宣伝家であり、思想家としての、㈡ユニークな革命的社会哲学者としての、㈢アナルコサンディカリストとしての、それぞれの大杉の顔である。

この三点について大杉の革命思想は日本思想史の中でその正しい席を確定されてはいないのが現状である。

大正揺籃期にはその時代精神を構成する三つの大きな潮流があったと思われる。即ち、その第一の流れは大正デモクラシー運動であり、第二の流れは大正社会運動――民衆運動であり、最後の流れは大正テロリズム運動であった。(注)

(注)　少くとも大正前半期においてはこの三つの潮流が有機的＝立体的に複合し、絡み合いながら一つの時代的奔流として流れていたと思う。これは明確に明治の時代潮流と質的に内容を異にした揺籃期であったことは事実である。

ところで反戦反軍思想家としての大杉は、明らかに二つの時代的段階を経ている。即ち明治平民社的非戦思想家の段階と大正反戦反軍思想家の段階と……。

明治反戦思想の系譜は中江兆民の万国民主共和制連合の「万国共議政府、無上憲法」に基づく非武装平和論から始まって、明治反戦思想（運動）は日露戦争前から最も盛り上る。日清戦争の頃はこれを「義戦」と称して賛成したクリスチャン内村鑑三も日露戦争にはっきりとキリスト教的絶対非戦論の立場から反対しており、又同じクリスチャンでも社会主義的色彩をもった木下尚江の反戦論が、明治反戦思想の一つの陥穽でもあった天皇制国体論を「神権的君主独裁」であり、それに基づく「愛国思想」と「皇民思想」をきっぱりと否定し、反戦論と国家観との不可分のつながりを天皇制否定論を通して具体的にあきらかにした点は特筆されるべきである。

明治反戦思想におけるキリスト教思想の影響は極めて大きいが、内村や木下と共に並んでキリスト教的非戦論者として忘れてはならない石川三四郎は木下と共に極めて重要な立場を提起している。彼の論文「階級戦争論」は「日露戦争＝階級戦争」の立場を提起しているにもかかわらず、そして労働者の階級的自覚の必要性と階級戦争の非和解性と不可避性を提起しているにもかかわらず、その現実的方向はキリスト教的人道主義と絶対的非暴力に基づく合法主義の枠内に閉じこめてしまっている。

以上の如きキリスト教的反戦思想と共に明治反戦思想の華は幸徳や堺、森近、大杉らに代表される平民社非戦論の思想である。平民社非戦論の立場はその首領格の幸徳の思想的立場に代表され、「それは社会民主党の宣言の立場をうけつぐものであり、絶対に暴力を否認し、『国法の許す範囲』において、反戦に視点を集中して平民主義、社会主義、平和主義を主張した」(『近代日本思想史講座』第Ⅰ巻)ものであるが、明治的な少数の左翼インテリ層の鋭角的な思想産物の域を出るものではなかった。

さて大杉の、外国の反戦資料や著作の翻訳と紹介を主とした前期反戦論は明らかに平民社非戦論の中に入ると思われる。この頃の大杉は日本最初の反軍思想事件と言われる例の一九〇六年の「新兵事件」を惹起した反戦論文「新兵諸君に与う」を始めとして、殆んど翻訳紹介が主で独自の思想的立場を形成していたとは言えない。

大杉が明治反戦思想からの飛躍を勝ち取り、それなりの独自的な思想的立場を形成するのは次の四つの跳躍台を経る過程である。即ち、足尾暴動と軍隊の流血弾圧、千葉監獄での思想的苦闘、第一次大戦の勃発とインターナショナリズムの獲得＝ナショナリズムの超克、そして最後にロシア革命の激発と米暴動の爆発である。

その過程で大杉は、㈠階級的視点からの階級戦争論の提起（一九一四年「欧州大乱と社会主義者の態度」）、㈡階級闘争での反戦闘争の独自の戦略的位置付けを行い（一九〇八年「非軍備主義運動」）、極めて重要な問題を提起している。

㈠の点は明らかに石川三四郎流の人道主義的で観念的な「階級戦争論」の域を越えており、その現実的で具体的な方向を、アナルコサンディカリズムのゼネスト論と結合させたエルヴェ流の戦時一揆＝戦時ゼネスト論として説いている。(この説の欠陥は第一章で既述)

㈡の点は木下尚江の「非軍備」論を発展させ、幸徳やエルヴェ流の思想を国内の歴史的事件を踏み台にして「非軍備主義運動」から「軍隊破壊」論＝「隊内叛乱」論へと発展させている点である。(第一章参照)

以上の二点において大杉ははっきりと明治反戦思想の地平を越えているにもかかわらず、その最大の陥穽は反戦思想をはっきりと国家思想と有機的に結合させて展開しなかった点にある。それ故にその点こそ大正反戦思想の極めて重要な課題であった日本ナショナリズムの超克とインターナショナリズムの獲得が十分に展開されなかった最大の根拠ではなかろうか。即ち、木下尚江が喝破した「天皇制国体論」＝「皇民愛国思想」の否定的立場の発展こそが、大正反戦思想の重要な課題の一つであったのではなかろうか。この点に関して大杉は、明治的伝統思想を真に踏みこえていたとは言えないであろう。

更に重要なことだが、この大杉の反戦反軍思想が大正社会運動は勿論のこと、昭和期のアナルコサンディカリズムのみならず、マルクス主義的な日本社会運動（反戦反軍運動）や思想に如何なる影響を与え、問題を提起したかも全く素通りされ、不問にされてしまっているのもやはり正当な評価とは言えないであろう。この小論ではそこまで掘り下げることはできないが、思想史的にも今後の重要な課題であろう。

第二の、特異な社会哲学者としての大杉の評価で軸となるべき点は大きく分けて、

㈠　既述の彼の特異な人間社会学の評価と位置付け。

(二) ニーチェ、ベルクソン等の影響を大きく受けた実存的な「生の永久革命論」者としての側面の位置付け。

(三) 最後にはこれはかねてより私が考えていた点ではあるが、クロポトキン流の進化思想家としての大杉が、プルードンやクロポトキン等のユートピア思想を媒介とした一種の自然回帰論者であったことであり、この点の位置付けが今後必要となってくるのではないかと思われる。(注)

(注) 私は日本自然回帰論は人間本性への信頼と生の讃美を媒介とした自然なすがままの、人間本来のユートピア社会を理想化するものであり、近代日本においては安藤昌益—内村鑑三—大杉栄—橘孝三郎（権藤成卿）らがこの流れをくむのではないかと思う。確かに自然回帰論的な考え方は古くは仏教涅槃経の思想にもみられるし、親鸞の思想（「教行信証」）にも色濃くみられるが、近代日本思想史の中でこの自然回帰論の思想を正しく位置付けることは重要ではなかろうか。例えば同じ自然回帰論（生の進化説を基礎として）と言っても、大杉らの思想と橘孝三郎ら日本農本主義思想にみられるそれとは大きな質的相違がある。この点を松沢哲成氏はその著書『橘孝三郎』の中で一緒にして原始回帰論者としてひとまとめにしているのは不十分であり、誤解を招き易いと思われる。

以上の三点を軸にして社会哲学者としての大杉の思想史的確定の問題点を出してみたい。

大杉独特の叛逆論の第一の基礎となっている彼の人間社会論は、スティルナー、ニーチェ、ベルクソン、プルードン等の思想の影響を受けて、

(一) 人間の「生命的存在でもあり、同時に社会的存在」でもあると言う人間存在論の位置付けであり、

(二) プルードンの矛盾の永遠的均衡弁証法やバクーニン等の「永遠」哲学を背景とした人間の「永遠的な生の自己闘争を繰り返す矛盾的存在」としての規定であり、

(三) 更に特異の、彼の主体性論としてニーチェやベルクソン等の反合理主義や直観主義と結びついた「自我（棄脱）」論であり、

(四) それが、アナキズムやマルクスの思想に媒介された史的社会観と、どちらかと言えば自然科学（生物学的）見地からの自然観＝宇宙観が、厳密に言えば無媒介に彼個人の頭脳の中で立体構築された人間社会学の位置付けについてである。

この大杉の人間社会学は大正思想史の中でも、西田哲学の流れを汲む三木清、阿部次郎らの大正人間主義、大正ヒューマニズムともはっきりと異なった人間観、社会観をもっているものであり、この点の分析は大きな課題ともなろう。

二番目の「生の永久革命」論者の大杉についてであるが、大杉の言う永遠叛逆論は主としてニーチェやバクーニン哲学からの永遠性概念や、ベルクソンの生命運動の純粋連続性や純粋燃焼性の概念や、ニーチェ流の生命の創造性の概念を革命的に抽出し、摂取したものである。大杉がニーチェに如何なる理論的影響を受けていたかは、彼についてベルクソンやバクーニン等の如くまとまった論文がないので明確ではないが、第一章で既述の如く、大杉哲学が生の永久闘争を強調すると共に、生の力の闘争の強調をも行っているところから、かなりの影響はあったと思われるべきである。ただ、ニーチェ思想の影響と言う点から言えば、例えば高山樗牛の「日本主義」にしても、或いは西田幾多郎のみならず西田門下の三木清、阿部次郎らもニーチェに少なからず影響を受けていることからも、大杉がニーチェとかベルクソン等の生命の哲学から如何なる革命的側面を引き出し、どのように摂取していったかが追求されねばならない。

大杉が一体あれほどにまで生命の哲学を強調する背景としてニーチェ等の一面として〈生の讃美者〉の哲学と共に、もう一つの面である〈生の否定者〉としての哲学的側面をどのように克服していったのであろうかは探りを入れるべき点であろう。

大杉には確かに多分に自然回帰論につながる「生へのロマン」の側面が目立つけれども、だが同時に生の負性の業としてもつながる「生のリアリティ」の側面も強調している。それは彼の運動哲学の基礎ともなっている「生の力の哲学」にもあらわれているが、しかしそれは哲学的に掘り下げられるというよりも、彼の反権力論や政治否定論の中に短絡化されてしまっているのではないかとさえ思われる。

ところで、三番目の自然回帰論者としての大杉の顔には次のような重要な側面が横たわっている。

(一) 生物進化論者としての大杉自然回帰論

(二) 将来社会論としての自由連合社会論の基礎としての大杉自然回帰論

ニーチェは或る意味では逆説的な生物進化論者（?）であったかもしれないが、クロポトキンにせよ、大杉にせよ明らかに生物進化論者であったことは事実であり、又社会進化論者でもあったことが、ニーチェやベルクソン等との大きな相違でもあると言える。

その進化原理としてダーウィニズムの自然淘汰説とは異なって相互扶助説をとっている点なども、自然回帰論を取る哲学的背景にもなっている。当時の進化論者丘浅次郎に比して遙かに大杉進化論の方が説得力をもつけれども、しかし自然回帰論が現実思想としてどれだけの有効性をもつのかは即断はできないが、一つのユニークな問題を提起している。

将来社会論の基礎としての自然回帰論であるが、大杉は人間は本来的に自然悠久の原理を体現しているものであり、自然の調和と秩序を自ら形造ることのできる能力をもっていると考えている。それ故にその障害や足伽となっている諸々を取り払い、自然と人間の有機的一体化論を考えていたのではないかと思う。それは単純に原始自然社会への回帰を理想化するといった短絡的な産物ではなく、大杉の自然観や人間観の真髄から出ているものであると見るべきであろう。大杉はこの自然回帰論を背景として、プルードンやクロポトキン流の自由連合社会論を考えていたのではなかろうかと思う。

大杉の永遠叛逆論での永遠性の概念は、自然の永遠性に対して人間存在の永遠性を内在的に展開した点などに大きな特色があるが、それはニーチェやプルードンの哲学に立脚していたのであるが、その永遠精神はバクーニンの次の言葉が最も端的に表現しているであろう。

「さらば、我々は永遠なる精神に信頼しよう。この精神はそれが一切の生命の不可測な、永遠に創造的な源泉なるが故にこそ破壊し否定するのだ。破壊の快楽は同時に創造の快楽なのだ。」

この大杉の永遠性概念、即ち生の永遠革命が社会革命と個人革命の同時実現論の重要な哲学的基礎となっていることに注目せねばなるまい。近代の思想家の中で大杉は「永遠性」を革命哲学に位置付けようとした数少い一人であろう。

第三点のアナルコサンディカリストの大杉であるが、彼は日本で最も早く社会主義と労働運動を哲学的＝思想的に、実践的に結合せんと努力した革命家であることは正当に評価せねばならない。

マルクス主義が未だ殆んど影響をもっていなかった大正初期の揺籃的な社会運動の中で、アナルコサンディカリズムが果した歴史的な意義は揺籃期としての大正期と言う時代的規定性に大きく依拠したものであることは事実であるが、同時にアナルコサンディカリズムが大正社会運動の澎湃として湧出するエネルギーの昂揚を、大正期の時代的エネルギーとして牽引していった先駆であったこともまた事実である。その中心的存在であった大杉が、自らの実践的方向をアナルコサンディカリズムに求めていったのは、彼の哲学的帰結でもあるのだが、しかしそれが又、第二インター崩壊後のヨーロッパの行動的サンディカリズムに比し一つの特色になっているとも言える。

大正揺籃期にアナルコサンディカリズムが労働運動の主流になった要因は、「大戦中から後にかけて、世界的に労働組合運動が風靡したこと、大杉・荒畑らがこの理論をもって早くから精力的に労働組合に働きかけたこと、普選運動が原内閣と政友会によって、頑強に拒否され、近く実現しうる見透しを失ったこと、九年三月の戦後反動恐慌で、労働攻勢が資本攻勢にところをかえたこと」（『近代日本思想史講座』I）等にある訳であるが、大杉にせよ、山川にせよ、揺籃期におけるアナルコサンディカリズムの歴史的意義はそれぞれ認めていたにせよ、その発想は異なっていた。大杉のアナルコサンディカリズムは歴史的背景のみならず、彼の革命哲学の一つの（全てではない）実践的帰結としてあった訳であり、それは単に「サンディカリストとして大杉の主張は『政治革命若しくは社会革命は必ず或る哲学的思潮を伴う。或はそれに先立れるか或は又それに先立つ』（「近代個人主義の諸相」）と言う立場にたって社会主義理論にしばしばみとめられる機械論的な決定論に能動的なモラリズム、ないしは精神主義をもち込んだ点にある」（「日本精神史への序論」）だけではない。単なるサンディカリズムと彼の革命哲学の接木としてあったのではなく、それに至る苦闘的飛躍があった訳である。

それ故大杉のアナルコサンディカリズムは、極めて現実感覚にすぐれた山川均と違って、単に当時の歴史的事実や歴史的背景から大正労働―社会運動の抬頭を先見し、その時代精神やエネルギーを嗅ぎ取り、引き出した実践的帰結のみならず、彼の哲学の一つの必然的帰結でもあったのだ。

彼が殆んど大正デモクラシー運動には関わらず、独自の側面から大正社会運動に関わっていった要因はどこにあったのか。

大正デモクラシーの共通精神が「教養文化主義」「理想的人格主義」であった等とするならば、勿論大杉にもその傾向はあった。又、彼がアナルコサンディカリズムの立場から政治運動の否定と経済主義を標榜していたからとするならば、確かにそれも一因ではあるが根本的要因ではないような気がする。（大杉は政治については最も包括的で根本的な把え方をしていた。）

どちらかと言えば「筆の人」たる大杉が大正デモクラシー論争の渦中に入って、高踏貴族主義的な傾向を指弾する論陣を張ってもおかしくはない。やはり彼が大正デモクラシー論争と微かな接触しかしなかった最大の要因は、一つには彼の革命哲学の軌跡が大正デモクラシー論争の軌跡と共通した地平とサイクルをもたなかった点にある。（注）二つには「眼の男」大杉が大正揺籃期の歴史的原動力を大正デモクラシーの潮流よりも大正社会運動の中に見出していたこと、三つには彼の実践家として自覚と体質と嗅覚が、彼の論争癖を抑えたと言えよう。

ともあれ、アナルコサンディカリストとしての大杉は、大正アナルコサンディカリズムの歴史的意義と切り離しては評価されえないことも事実である。ただ、大正アナルコサンディカリズムを「『時代閉塞の現状』下、労働階級の敗地をなかば既成の事実として承認することから出発せざるをえなかったアナルコ・サンディカリズム」（「日本精神史への序論」）としてはあまりにも一面的な結果解釈主義でもあると言える。やはり、その歴史的背景の中で彼のアナルコサンディカリズムの包括的で、立体的な把え方をする必要があるのではなかろうか。

（注）大杉にとって極めて重要な課題であった筈の天皇制論争にも彼は全く関係していない点など。

大杉自身そのものが人物論として極めて興味の湧く対象であるが、彼の思想は実に多方面に亘り、性解放論や文芸論などのそれなりの位置付けを改めて正しくなされる必要性が早急にあるであろう。

既述の如く、私自身は勿論アナキストでもなく、又アナキズム思想にそれほどの造詣が深い訳でもないが、大杉の正当な位置付けの痛感と大杉に対する一種の共感がその気持をおこさせた。それ故に、多くの不備や不満な点が多々あることかと思う訳であるが、大杉思想の全体像はまたしかるべき人がやるべきであろう。この小論はそのためのその一つの試みでしかない。

直接購読のすすめ

『黒の手帖』は定期刊行の雑誌ではない。文字通りの不定期刊行物である。別記の書店を除いては、市販していない。だから、『黒の手帖』を確実に入手するには、二号分あるいは四号分前金払い込みで直接読者になるのが一番である。

『黒の手帖』は広告を一切取らない方針である。理由は、広告を取る煩わしさにかかわりたくないためと、小さな誌面を大事にしたいためである。だから読者の購読料が『黒の手帖』の主要な収入源になる。読者が口伝てで『黒の手帖』の存在を知らせて、直接購読者となることをあえてお願いしたい。

購読料の払い込みは（振替東京一〇二四六五番）か現金封筒の利用が、一番安全である。切手で代用されてもよい。

◆『黒の手帖』取扱書店◆

東京＝文献堂、ウニタ書舗、吉祥寺ウニタ、文泉堂、模索舎、麦社。川崎＝甘露書房。仙台＝八重洲書房。名古屋＝ちぐさ正文館、名古屋ウニタ。京都＝三月書房、京都書院、ふたば書房。大阪＝大阪ウニタ、曽根崎書房。神戸＝イカロス書房。北九州＝未来書房。札幌＝アテネ書房。